

{12}  
ベトナム

健全娯楽か退廃文化か  
——ドイモイ下で楽しむ人々

出井富美

今年も、ベトナム人にとって一年中で最大の楽しみであるテト（旧正月）がまもなくやってくる。ベトナム人の間では、“一月（旧暦）は飲んで食べて遊んで暮らし、二月は賭事を楽しみ、三月は例祭に行き、四月は……”と 昔から言い習わされており、今もなおこの生活感が根強く残っているようだ。

おしゃべり

ベトナムで正月はアン・テト（*Ang Tet*）という。アンは食べる、テトは正月、“ご馳走を食べてお正月を祝う”という意味になるのか。美味なるものへの執着心はベトナム人もきわめて強い。そしておしゃべりが大好きである。テトは食べて、飲んで、おしゃべりを楽しむまたとない祭日なのである。日常の生活は節約して、テトには思う存分飲み食いを楽しむ。ベトナムでは正月休日は三日間だけだが、実態としてはこのお正月の週とそ

の前後の二週間、すなわち三週間は全く仕事にならず、開店休業の状態と化す。正月前の一週間は花市で飾り付け用の桃の花枝や金柑の鉢植えを買い出し、正月料理の準備に余念がない。後の一週間はお屠蘇気分、余韻を楽しむ週間である。

大晦日、十時を過ぎる頃から待ちきれないようにあちこちで爆竹が断続的に鳴らされはじめる。子供たちも大人も、しだいに興奮してくる。いよいよ十二時、ものすごい轟音が鳴り響く。ハノイ市はもとより、ベトナムのいたるところで一斉に爆竹が火を吹く。空には無数の火花が打ち上げられる。ホーチミン市ではサイゴン港に停泊中の船舶が年明けを祝って一斉に銅鑼を鳴らす。若者たちがラリーしながらバイクで街に繰り出す。テト饗宴の幕開けである。

ベトナムでもお正月にはまず家族でお節料理を食べてチュック・ムン・ナム・ムイ（明けてからおめでとう）！その後、実家への挨拶を皮切りにいよいよ本格的なテト饗宴が繰り広げられる。兄弟あるいは日頃つきあっている親しい友人グループの家々を交互に宿にし、昼も夜も飲んで、食べて、おしゃべりの宴会を続けるのである。ハノイで迎えた最初のテト、筆者の大家さん夫妻のグループ（六家族）の一員として認知された筆者は幸か不幸かこのテト饗宴の洗礼を受けることになった。どこに行ってもテーブルには煎ったひまわりの種やかぼちゃの種、ココナツなど各種のフルーツの砂糖菓子置いてある。男たちはこれをつまみながら酒を飲み、おしゃべりに興じながら女たちが作る料理が出来上がるのを待つ。料理が出来上がるとタイル

床にゴザを敷き、大人グループ、子供グループでそれぞれ車座になって料理と会話を楽しむのである。政治談義、仕事の話、人の噂話等々話は尽きない。毎夜帰宅は十一時を過ぎる。テト饗宴がようやくにして終わったのは、お正月十日目。ベトナム人の飽くなき遊びの追求とグルメ志向には感心するやら呆れるやら、複雑な心境になったものである。

ベトナム人の議論好きには定評がある。ベトナムには喫茶店（ソフトドリンクだけではなく、ビール等も飲める）が多いが、ここでもおしゃべりを楽しむベトナム人の姿が日常的にみられる。ベトナムのアルミニウム製のコーヒードリッパーは孔が小さく、粉末状に挽いてあるベトナムコーヒーには不向きで、なかなか落ちてこない。せっかちな日本人はいらいらせられ、ドリッパーの底をスプーンで擦ったりする。しかしベトナム人はまったく意に介さず、この間ゆったりとおしゃべりに興じるのである。ある国際会議のレセプションで日本人が、ベトナム人は演説はうまいが経済運営は下手だと評すると、あるベトナム人が、日本人とベトナム人を足して二で割るとちょうどいいのだが、とやり返した。ベトナム人の弁舌さわやかな秘密は、子供の時代からおしゃべりを培う場に恵まれているせいかもしれないと思ってみたりする。

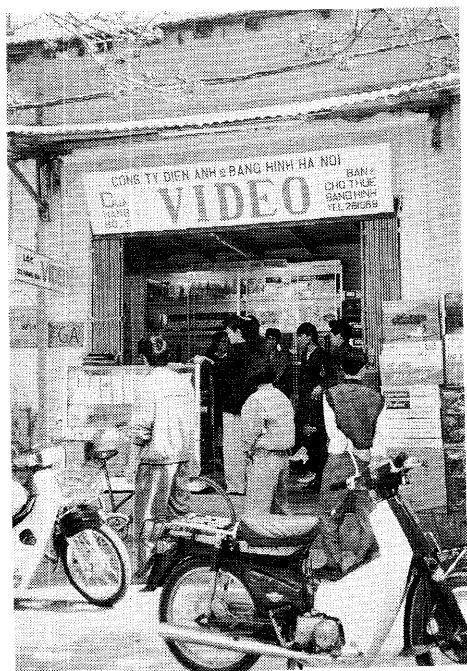
### テレビ、ビデオ

現在のベトナムで、おしゃべり以外の最も大衆的な娯楽はといえば、テレビであろう。ベトナムには国営のベトナム中央テレビ局と各地域ごとの地方テレビ局の二局が朝、午後の一定時間、夜は六時から十時半頃まで放映している。ベトナム

全体のテレビの普及率はまだ低い、ハノイ、ホーチミン市など都市部に限って言えばかなり高くなってきた。テレビのない世帯では近くの喫茶店で見ているようだ。筆者の周囲では、映画を観ている人は非常に少ないがテレビは日常的に見ている。テレビで放映された番組についての話題が実に多い。

最近、よく話に出るのはメキシコのテレビドラマ「私はマリア」である。以前にもメキシコのテレビドラマ「金持ちでも泣く」が長期間にわたって放映され、人気を博したが、メキシコから直接輸入されたものではなく、ロシアやハンガリー経由で入ってきているようだ。ベトナムのテレビでは外国フィルムの放映時には字幕スーパリーや多人数によるベトナム語への吹き替えはまだ行われておらず、一人の声優が、登場人物の台詞を読み上げる、いわば「弁士」の声をかぶせる方法が採られている。

「私はマリア」は、貴族階層の青年と貧しい農家出身の女性の身分不相応の恋愛を縦糸にして、その周辺で展開される人間模様を描いたドラマだが、ベトナム人は一週間に一回の放映を楽しみに見ているようである。お年寄りは翌日午後の再放映も楽しみ、若い女の子たちはホセ・イグナシオのような男性がいいとドラマの登場人物に理想の男性像をだぶらせたりしている。最近放映されはじめた映画が、中国の「最後の皇帝」である。「私はマリア」を凌ぐ人気である。日本映画では「侍」「キネマの天地」等が放映されたが、特に前者は多くのベトナム



ビデオショップに集まる客たち

人が見たようだ。筆者も七、八人のベトナム人から、日本の政治・社会・文化的風土、あるいは日本人なるものが幾分理解できた等の感想を聞かされた。テレビはベトナムにおいてもお茶の間の娯楽として、その地位を定着させつつある。

レンタル・ビデオショップの盛況ぶりも目立つ。私営のビデオ店も増えている。ハノイでも最近、めっきり多くなつたが、特にホーチミン市に多い。現在、三〇〇軒近くの店があり、一軒平均五〇〇本の各種のレンタルビデオを品揃えしているという。ミュージックビデオ、映画、伝統芸能（チェオ、トゥオン、カイルオン）のビデオがよく借り出されている。レンタル

料は一本一日、一〇〇〇～二〇〇〇ドン（一円は約一〇〇ドン）と比較的安く、週末にはビデオショップが賑わう。

国産のビデオもあるが量産体制にはまだなく、もっぱら香港、アメリカ、台湾などから持ち込まれる外国製ビデオ（多くは密輸）に席巻されている。国内ビデオのシェアはわずかに一％。文化・通信省は国内でのビデオ製作を重視し、従来の月二～四本の製造ペースを現在では二〇本まで増やしているが、レンタルビデオの需要に応えられない事態にあり、海外からのビデオテープの密輸に口実を与える結果となっている。しかし、レンタルビデオは一般家庭で見られるようになっていとはいえ、実態的に最大の利用者は喫茶店経営者である。この種の店では、客寄せ目的で各種の新しいビデオを次々に回転させなければならず、レンタルビデオへの需要は高まるばかりである。さすがに国営店には海外から密輸されたビデオは公然とは置かれていないが、私営の店には密輸ビデオを扱うところも多い。文化・通信省は海外密輸ビデオの氾濫に苦慮しているが、規制策にこれといった決め手がないのが実状のようだ。

**カラオケ** 首都ハノイでもカラオケが大流行し、街中には“KARAOKE”の看板を掲げる喫茶店、レストランが多くなった。

ある土曜日の午前中、知人の家を訪ねた帰り道、雨宿りに飛び込んだ小さな喫茶店では二人の女の子が交互にレーザーディスクの画面下にながれる歌詞を必死に追いかけて、ベトナム語の

歌の特訓中であつた。側には友人だろうか、若い男性が歌の指導をしている。間口が狭く、細長い店内には男性客がいた。特訓中の女の子たちの歌をしばらく黙って聞いていた一人の男性客が、指導をしていた男性に歌ってくれと言っている。その男性、一曲だけサービスをして、また女の子たちの歌に戻る。延々と一時間、他人の歌を聞くのも疲れる。まだまだ続きそうだが、雨はまだ降り止まぬ。が、自転車で飛び出すことにした。

歌の好きなベトナム人の間で、カラオケは有望な大衆娯楽産業として発展しつつある。カラオケがベトナムに入ってきたのは一九八九年頃からだという。ホーチミン市で始められたカラオケは首都ハノイはもとより今や北部の地方都市にまで広がっている。ほとんどのカラオケテープは海外のテープであり、その曲目は外国の歌、あるいはベトナム語歌詞が字幕スーパーで流れる香港、アメリカ製などの外国の歌である。日本の歌では五輪真弓の「恋人よ」がよく歌われている。

昨年九月、ホーチミン市で日本のソニーとホーチミン市テレビ局などの関係機関の後援によるカラオケ大会が開催された。観客はおよそ二三〇〇人。そのほとんどが青年、学生。大会にエントリーされた歌はベトナム戦争終結前のロマンティックな歌あるいは一九七五年以前南部の旧制度下で歌われた歌であり、民謡や抗仏・抗米救国戦争時期に創作された歌はわずかであったという。たかがカラオケ大会のこととはいえ、数千人の聴衆を集めた場で出場者の若者た



カラオケ喫茶

ちがメロディー、ベトナム語歌詞に合わせることなく、感情の赴くままに物憂く、甘美に、あるいは物悲しげに歌う姿を目のあたりにして、ハノイの新聞記者は、憂慮すべき事態とリポートしている。

ベトナムの友人によると、インテリ層はカラオケは好まない、とはいいが、実際には子供から年配者まで、シクロの運転手から大学教授まで、あらゆる年代、階層の人々を惹きつけているようだ。あるシクロの運転手は、夜になると自然にカラオケ喫茶に足が向いてしまう、疲れを癒すにはカラオケがいちばん、と言い、毎晩日銭をはたいてカラオケ喫茶に通う。料金は店により異なるが、平均的には一時間三〇〇〇ドンくらいが相場のようなのだ。この値段はベトナム人の

およそ一食分に相当する。外国人相手のカラオケバー、レストランでは部屋の大きさにもよるが、一室が三〇ドルから六〇ドルである。

一方、カラオケ繁盛にもなつて、さまざまな社会的問題も生起してきている。新聞報道によると、ホーチミン市やハノイではカラオケが原因の殺傷事件が起こり、また多くの青少年少女たちがカラオケに没頭し、その非行化も問題視されている。カラオケ喫茶の周囲では騒音公害への苦情も聞かれる。突如として耳をつんざくような爆竹の破裂音、朝晩ポリウムいっぱいに流される町内放送には慣れつこのハノイの人々も、異文化カラオケにはまだ慣れていないようだ。

カラオケの流行とともにセックスビデオ、暴力賛美ビデオなどが氾濫し、退廃文化流入問題としてベトナム当局を悩ませている。文化・通信省は一九九二年にカラオケ営業に関する指示を出し、カラオケテープの検閲等の強化を打ち出した。またハノイ市、ホーチミン市もカラオケに関する決定を出しているが、効果はまだ出ていない。ハノイ市のカラオケ営業店は九三年二月時点でおよそ五〇〇店。そのうち、営業登録を行っていた店はわずか五〇店のみ。多くは税金逃れのための無許可営業であつたという。

雨後の筍のごとく出現するカラオケ営業店、その隆盛を前にベトナム当局は、カラオケは一つの科学的・文化的産物である、と追認せざるを得ない状況にある。しかし、問題は健全な文

化、音楽活動として労働者に楽しんでもらうために、その営業内容、カラオケビデオなどの輸入の検閲に力を入れるべきであるとして規制強化を打ち出すとともに、国内での製造を目指すべきであるとしている。現在ホーチミン市等で映像付きのカラオケテープの生産を開始しているが、しかし、映像付きの一八〇分ビデオテープの国内での製作費はコストが高くなり、また映像の美しさにおいて海外のビデオテープに太刀打ちできない段階にある。

## 映画

毎週土曜日の夜、映画館の前は若者でいっぱいだ。チケット売りが道路の真ん中まで出て自転車、バイクで行き交う人に券をかざしている。ベトナム全国の映画館数は二九六、ハノイには一〇館以上ある。一九九三年の各種の映画製作本数は一一八。そのうち、いわゆる劇映画は二三本。観客は若い青年たちが圧倒的に多い。ベトナムの青年たちも好きな俳優見たさに映画館に足を運ぶ。しかし、観客数はここ数年減少傾向にあるという。料金は五〇〇～六〇〇ドンと高い。

一九八九年後半頃から外国映画も上映されるようになった。フランス映画「インドシナ」も上映された。しかし、ベトナムの友人の話によると、性描写場面、政治的な発言部分などが若干カットされているようだという。一昨年に上映されたベトナム映画「川の上の女」(Cổ ai trên sông)は性的描写が露骨すぎると批判されたようだ。

ベトナムでも早くもレンタルビデオの時代に入り、大多数の大衆の足を映画館に向かわせる

状況にはない。今や映画産業は危機的状況、斜陽化の時代に直面している。映画衰退の原因はいろいろ取り沙汰されているが、ベトナム映画産業界がかつての国家丸抱えの経営体質を払拭できないことに最大の原因があるようだ。大衆を領導し、教育する芸術映画作りをとの意識は今も根強く、「商業映画」は単に大衆に迎合するものと軽視する傾向がある。国营企業の映画関係者の中にはドイモイ（刷新）政策により、国家からの助成金が少なくなり、独立採算制を余儀なくされたからだと強調する人も少なくないが、しかし、私営企業による映画は観客動員数で国营企業を凌いでおり、十分に商業ベースに乗っている事実がある。要は観客のニーズに応える映画を提供しているかどうかが問われている。ベトナム映画産業界でも国营企業の民営化が目指されているが、まだ軌道に乗るに至っていない。

第二に国からの助成金獲得の仕組



ハノイで有名な女優三姉妹（右から次女の Le Khanh、長女 Le Van、三女 Le Vi）

みが複雑で不合理なことである。従来は国営の各映画製作会社の製作映画の内容が文化・通信省映画局の検閲にパスすれば製作費の全額が直ちに支給されたが、現在では一本の映画製作に対して最大で総製作費用の六〇%しか支給されず、しかも六〇%の助成金満額を獲得するまでにはシナリオ作成段階、フィルム製作終了時と、何段階もの厳しい検閲・審査を通らなければならない。

また、映画局が製作を担当する国営の会社を指定する制度になっているが、シナリオを作成した会社と映画局が指定する製作会社が異なるケースが多々あり、シナリオ作成会社の映画製作の意図、熱意が損なわれることになる。すべてが映画局の一存で決まる仕組みである。各製作会社はこの不合理を是正すべきであると声高に訴えている。海外から大量に流入するビデオ映画の脅威に曝されながら、ベトナム映画産業の生き残るための模索が続く。

\*

社会主義を維持したまま開放経済体制に踏み切ったベトナムにおいて、今、人々のくらしとあそびも急激に変容しつつある。いつの時代にも、いずれの国でも異文化を先取りするのは若者たちだ。否応なしに海外から大量に流れ込んでくるビデオ文化、その魅力に酔いしれる若者たち。次世代を担う若者たちに健全な娯楽をと、ここでも対応に苦慮するベトナムの党と政府の姿がある。